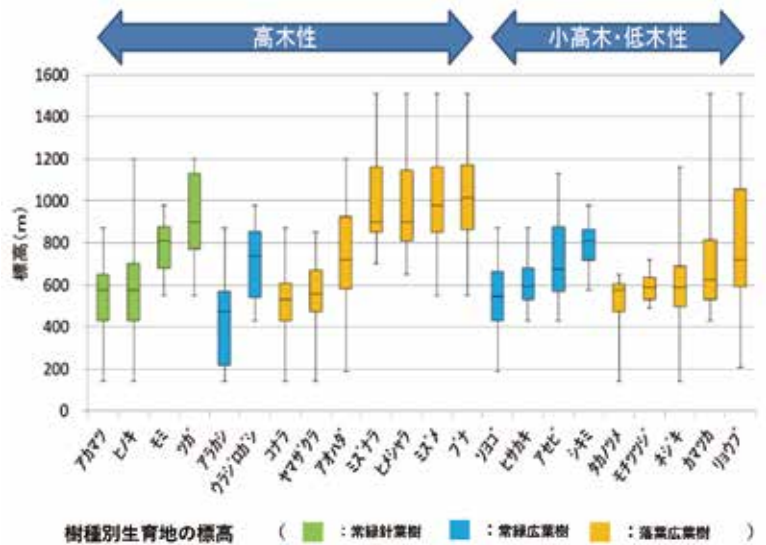


1. 奈良県内の天然生林で生育する樹種

地域の特性に応じた樹種の候補として、人の手があまり入らず、自然に成立している天然生林を構成している樹種があげられます。

奈良県内の天然生林において、よくみられる樹種の標高分布は右のとおりです¹⁾。高木性の樹種ではアカマツ、アラカシ、コナラ、ヤマザクラが標高600m以下の低地に、ツガ、ミズナラ、ヒメシャラ、ミズメ、ブナが800m以上の高地に多く分布しています。

本報告書では、奈良県内の天然生林を構成している樹種で、聞き取りの結果、今後も用材としての需要が見込まれる高木性の樹種10種について、分布等の詳細を後述（P10～14）します。



※天然生林と判定した24林分中6林分以上に出現した樹種の標高分布
 ※箱内の横線は中央値、箱の上下は75～25%の範囲、上下に伸びる線は最小値、最大値を表します。
 (林野庁実施「森林生態系多様性基礎調査」第3期(平成21年度～25年度)調査結果を基に作成)

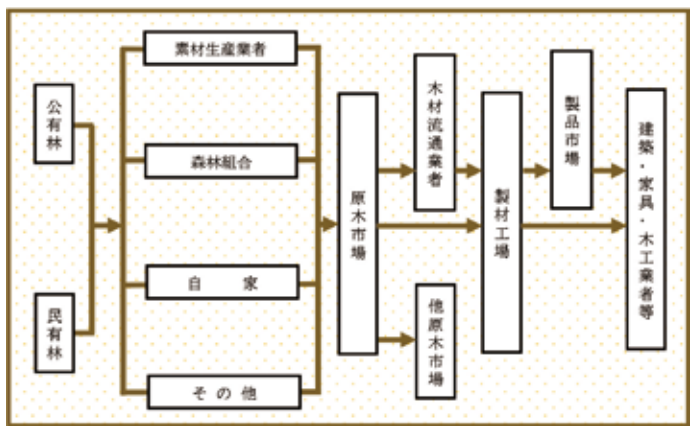
2. 広葉樹材の流通【調査結果】

広葉樹材の取引状況を把握するため、県内外の市場に聞き取り調査を令和2年7月から令和4年1月にかけて実施しました。

民有林や公有林から搬出された広葉樹用材（建築材や家具材など）の主な取引ルートは右のとおりです。

低質材は紙パルプ工場やバイオマス工場へ流通します。

奈良県内で、通年広葉樹を取り扱っている桜井木材協同組合における広葉樹の年間取扱量は100～200m³で、市売り回数は月に2回となっていました。一番取扱量の多い樹種はケヤキで、他にはトチノキ、サクラ、ナラ、クスノキなどが取り扱われていました。主な購入者は県外の市場関係者や家具関係者となっています。主な用途は家具、木工、チップで、だんじりの土台や寺社仏閣の門などに使われる例もありました。



用材の主な取引ルート



原木市場（奈良県銘木協同組合）